学会創設 40 周年記念

民族藝術学会 第 40 回大会

「民藝」と “arts/ ”

発表要旨集

2024 年 4 月 20 日（土）-21 日（日）

関西学院大学西宮上ケ原キャンパス

H-301 教室

主催：民族藝術学会

後援：関西学院大学

学会創設 40 周年　民族藝術学会 第 40 回大会

会期：2024 年 4 月 20 日（土）-21 日（日）
主催：民族藝術学会　　後援：関西学院大学
会場：関西学院大学 西宮上ケ原キャンパス　H-301 教室
（理事会・評議会／総会：H-302 教室）
大会テーマ：「民藝」と “arts/ ”
大会事務局：関西学院大学
民族藝術学会第 40 回大会実行委員会
濱田琢司（委員長）、岡本弘毅、丹羽朋子、服部　正、福内千絵

《大会プログラム》

第 1 日目　4 月 20 日（土）

11:00	理事会・評議員会（H-302 教室）	
12:45-13:30	総会（H-302 教室）	
13:45	開会の挨拶　　会長・吉田 憲司	
14:00-17:05	シンポジウム　「民藝」の現在と “arts/ ”	
	司会：濱田 琢司	
14:00-14:15	趣旨説明	濱田 琢司（地理学）
14:15-14:40	「民藝運動」の現代史 : 庄司宣夫氏の実践を手掛かりに	團 康晃（社会学）
14:40-15:05	民藝運動と女性の仕事：岡山県、兵庫県における染織をめぐる事例を中心に	小野 絢子（民俗学）
15:05-15:30	現代の「暮らし」像の中の「民藝」:生活の美化、無名性、地方	阿部 純（メディア文化史）
15:30-15:55	手仕事・風土・素材を再編する思想と実践：日本と中国における実験的プロジェクトから	丹羽 朋子（文化人類学）
15:55-16:10	休憩（15 分）	
16:10-16:25	コメント	竹中 均（社会学）
16:25-17:05	討論	
17:05-17:15	休憩（10 分）	
17:15-17:35	第 21 回木村重信民族藝術学会賞授賞式	
17:35-18:35	茶話会	

第 2 日目　4 月 21 日（日）

9:30-12:05	一般発表（午前）	
	（発表 25 分、質疑応答 10 分、入れ替え 5 分）	
9:30-10:05	触察用楽譜「撫譜」と明治期における盲人による記譜の試み	村山 佳寿子 （音楽）
10:10-10:45	民藝運動と芸術療法との連環―式場隆三郎が感化させた日本における芸術療法の始動―	石田 陽介 （芸術療法論）
10:50-11:25	芭蕉布・平良敏子の仕事と民藝運動	栗田 邦江 （工芸）
11:30-12:05	沖縄文化における「現代の琉装」	大竹 有子 （文学）
12:05-13:15	休憩（70 分）	

13:15-15:10	一般発表（午後）	
	（発表 25 分、質疑応答 10 分、入れ替え 5 分）	
13:15-13:50	黒木寛と関西学院での三ヶ月	海野 るみ （文化人類学）
13:55-14:30	グローバルマーケットと結びついたパプアニューギニアのネットバッグ生産―二人のアーティストの活動を通して―	新本 万里子 （文化人類学）
14:35-15:10	政治・運動と視覚表現―ダッカ旧市街の「独立戦争壁画」とバングラデシュ美術―	五十嵐 理奈 （文化人類学）
15:10	閉会の挨拶	
15:25-16:30	関西学院大学ヴォーリズ建築見学（自由参加）	案内： 石榑 督和

シンポジウム
「民藝」の現在と “arts/ ”

趣旨説明

濱田 琢司（地理学）

「民藝」という概念やそれが示す対象は、その誕生から、新規さや革新性と伝統性や保守性、都市的なものと地方的なもの、新しいものと古いもの、といった二項的な対比軸を行き来するような多様な様相を示しながら、およそ 100 年のその歴史を歩んできている。2021 年から 2022 年にかけて東京国立近代美術館で開催された「民藝の 100 年」展は、こうした「民藝の歴史」を、非常に広範な視点から多面的に考察した画期的な企画展であった。他方、この言葉を生み出し広く世に知らしめた、民藝運動という文化運動は、その母体となる日本民藝館や日本民藝協会といった施設・組織の存在とともに、1920 年代のそのスタートから途切れることなく現在まで継続しているという特性も有している。

そうした状況のなかで「民藝」は、現在においても、特定の個人を感化し得る概念でもあり、新規の愛好者を獲得するような対象となっており、かつ何らかの商品に付加価値をまとわせるような対象でもある。そこで、本シンポジウムでは、歴史的な過程も踏まえつつ、「民藝」の「現在」に焦点をあてて、民藝をめぐる生産、メディア、消費など多様な視点から、「「民藝」の現在」と “arts” に連なる様々な事象を読み解いていきたい。

「民藝運動」の現代史 : 庄司宣夫氏の実践を手掛かりに

團 康晃（社会学）

1926 年の「日本民藝美術館設立趣意書」の発表から近く 100 年を迎える。「民藝運動」は 100 年の歴史を持つことになる。

本報告は九州、長崎で「カレー＆工芸　けやき」を営みながら民藝運動に 50 年以上携わっておられる庄司宣夫氏のライフヒストリーを導きに、戦後の民藝運動の展開について考えたい。

それは民藝についてテクストを通した理論的な、思想史的な検討ではなく、民藝に出会い、学び、実践してきた庄司氏の人生から一つの民藝の経験を読み解くものだ。

そこには「民藝」の現在を考える上での様々な論点がある。一つには世代について。庄司氏は外村吉之介氏と出会い、民藝運動、特に民藝夏季学校に携わられてきた。二つには民藝とモノについて。「民芸品」とは何か。作家作品、古民藝、日用品、雑貨。様々なモノと庄司氏はどう付き合ってきたのか。三つには、作ることについて。庄司氏は北窯の松田米司氏の外弟子でもある。その中で、様々なものとの出会いの中で作ることをどう考えてこられたのか。

民藝はこういうものだという境界を定めない方が良い、と庄司氏は語る。そんな庄司氏の実践から現代の民藝の一端を描き出したい。

民藝運動と女性の仕事：岡山県，兵庫県における染織をめぐる事例を中心に

小野 絢子（民俗学）

思想家の柳宗悦によって創始した民藝運動は、講演、蒐集、展示など多岐に渡る活動を展開し、やがて全国へ広がっていく。こうした民藝運動の目標のひとつに、生活の中に民藝品を取り入れることによる「生活の美化」があった。民藝運動の機関誌として 1939 年から刊行された『月刊民藝』を紐解けば、家庭で家事を担う女性たちは重要な普及先であり、また一方で教育の対象としても認識されていた。

本報告では、岡山県倉敷市と兵庫県丹波市で染織に携わる女性たちの事例を手掛かりに、民藝思想が女性の生活や仕事に与える影響について検討する。岡山県では、染織家の外村吉之介によって、地域の主婦層に対して体験を交えた講座や染織を学ぶための住み込み型の学校が開かれた。兵庫県丹波市では、「丹波布」という地域の染織品の復興に民藝運動が関与し、この丹波布復興運動に女性たちが参加したことで民藝とも出会うことになる。彼女たちの仕事に向かう姿勢や、生活の様子を通して、女性にとって民藝とはどのような存在なのか考えてみたい。

現代の「暮らし」像の中の「民藝」：生活の美化、無名性、地方

阿部 純（メディア文化史）

本報告では、今日における民藝需要と受容とを再考するために、21 世紀初めに刊行されたライフスタイル雑誌 (『天然生活』『Lingkaran』) に焦点を当て、これらの雑誌の中で「民藝」がどのように語られてきたかについて整理する。

これらの雑誌では、創刊間もない時期に益子 (焼) を手仕事の現場や器の用い方といった切り口で見せるなど、民藝の考え方をこれからの「暮らし」を語る際の一つの規範として捉えていることがわかる。このような視点は、1970 年の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーン時に起こった「民芸ブーム」「消費型ふるさと」とも呼応する視点だ。一方で、今日においてより特徴的だと思われるのは、民藝が料理家・スタイリスト・古道具屋といった衣食住にまつわる職能を持つ人たち自身の暮らしに根差した形で語られることと、それらの語りが必ずしも柳らの民藝運動と結びついた語りではないことにある。ここから、民藝が新たな「生活の美」を視覚的かつ思想的に形成しているとも言えるのではないか。これらの観点を整理しながら、今日の「暮らし」と民藝思想との結びつきについて改めて考えてみたい。

手仕事・風土・素材を再編する思想と実践：日本と中国における実験的プロジェクトから

丹羽 朋子（文化人類学）

本発表では主に、日本で生まれた「民芸」の語や理念、往時の運動の軌跡等から触発・類縁関係にある、中華圏の二つの現代的実践を取り上げる。一つはグラフィックデザイナーとしても著名な黄永松氏らによる台湾の雑誌『漢聲』の取組み、もう一つは安徽省黄山を拠点にキュレーターの左靖氏が主宰する「碧山工銷社」の「百工」プロジェクトである。

両者はともに、中国各地の暮らしや自然資源に根差した手工芸文化を取材して雑誌や展覧会を制作したり、作り手とプロダクト開発を行う活動体であり、その実践は日本の民藝運動とも共通する。他方、前者が「母土」から離れた台湾人や文化大革命後の文化破壊を危惧した中国本土の芸術家・研究者らの 1970 年代末の「尋源」（ルーツ探求）から始まったのに対し、後者は消費社会や環境問題が前景化した 2010 年代以降、都市と農村、手工芸と現代デザインを越境する地域活性化を目的とする点で両者の方向性には差異がある。現代日本で進む手工業による地域振興や観光資源化等の取り組みとも比較しながら、「民芸」によって何が繋がれうるのか、その切断や再接続のあり方に注目して考察したい。

一般発表

触察用楽譜「撫譜」と明治期における盲人による記譜の試み

村山 佳寿子（音楽）

本発表では、盲人のための触察用楽譜「撫譜」に焦点を当て、その実態を明らかにする。

撫譜という名称は、これまで日本音楽の文脈にも、また、本来あるべき盲教育の文脈にも登場しない。しかしながら、撫譜は、日本の音楽教育の基礎を作るべく取り組んだ、箏曲の五線譜化を行う上での、ひとつの鍵を握る“モノ”である。この、箏曲の五線譜化は、発表者が研究テーマとして取り組んでいる、西洋の五線記譜法のシステムに基づく、箏曲の点字楽譜の形成過程にも通じるものである。

本発表では、もはや忘れ去られた存在である、この撫譜というものを中心に据え、撫譜それ自体や撫譜を用いた記譜の試みが如何なるものであったのかということを、史料や記録に残る言説を通して検証する。それによって、点字楽譜が盲学校の音楽教育に導入される以前の、明治期における盲人による記譜の試みの様相について明らかにすることを目的とする。

民藝運動と芸術療法との連環―式場隆三郎が感化させた日本における芸術療法の始動―

石田 陽介（芸術療法論）

芸術療法（アートセラピー）とは、芸術のもたらす癒しの作用を、近代医学のテクノロジーとして心身の治療へと応用した臨床技法です。現在、芸術療法は国内外において医療のみならず介護福祉や教育現場にも広く波及していますが、芸術療法が日本での精神科臨床へと取り入れられるに至った起点の一つに、民藝運動主要メンバーの式場隆三郎が翻訳し 1955 年に上梓した『絵画療法　painting out illness』（エイドリアン・ヒル著）が挙げられます。本書によって感化された精神科医らによって日本における芸術療法は 1950 年代後半に始動していきました。隆三郎の死後、長男の精神科医・式場聡は、医療人同志らと共に学術協会を立ち上げ、精神科医療における芸術療法の実践とそのエビデンス化をリードしました。そうした日本における揺籃期から現在の発展形までの芸術療法の推移を考察し、民藝運動との構造的な重なりを検証します。

芭蕉布・平良敏子の仕事と民藝運動

栗田 邦江（工芸）

柳宗悦は 1938 年に初めて沖縄を訪れ、大宜味村喜如嘉はどの家からも機の音がして活気ある様子だったと記述している。平良敏子は沖縄女子挺身隊の一員として派遣された倉敷で終戦を迎え、織物を学んで帰郷した。互いに教え合いながら芭蕉布を織ることを始め、販路に乗せ復興してゆく道筋をつくった。大原孫三郎・總一郎親子と倉敷という町、そして民藝運動同人たちの働きかけと喜如嘉で共同して働く人たちのたゆまない努力の積み重ねにより、芭蕉布とその技術が現在に継承されている。

平良敏子と同世代の志村ふくみは、柳宗悦の『工芸の道』を拠り所として染織の仕事を志した。芭蕉布保存会という団体として、紬織の個人作家として、それぞれ染織で重要無形文化財の指定を受けた２人の作家、平良と志村の仕事を対照しながら、平良敏子による芭蕉布の仕事の特色について考察する。

沖縄文化における「現代の琉装」

大竹 有子（文学）

「琉装」と総称される近代以前の沖縄の衣生活は、半世紀ほど前までの沖縄においては身近で一般的であった。しかし琉球国消滅から沖縄戦などを経て現代に至る過程で、琉装は和装・洋装に駆逐され、いまや日常着としての地位を完全に失った。

しかしここ数年、琉装を日常着として復活させようという動き（「現代の琉装」とする）が観察される。「伝統的」染織技術を取り入れた洋装は 20 年ほど前から作られてきたが、「現代の琉装」は近代以前の衣装の形式そのものに最低限のアレンジを加えて、生活に取り入れることを提案している。この風潮は沖縄県内でも一般的とは言い難いが、服飾・工芸関係者を中心にある程度認知されている。

本発表では、この「現代の琉装」について作家、博物館・美術館関係者、愛好者からの聞き取りをもとに現況を報告・分析する。またこれを主に近代以降の沖縄のアイデンティティ模索の一つの側面ととらえ、文学の事例もふまえて検証する。

黒木寛と関西学院での三ヶ月

海野 るみ（文化人類学）

黒木寛（1880-1926）は、昭和初期にレコードやラジオでよく聞かれた「女馬子唄」の作詞者（「耳村」名で作詞）として名前を遺している。彼は存命中の大正期に音楽教育の普及に携わり、音楽雑誌の編集主幹として西欧から流入した「音楽」と日本の「通俗的な」音文化との連関を図ろうとするなど、一般の人々に向けた新しい音楽概念の普及を図った人物だったと言える。

黒木の足跡は、宮崎県北部地域の偉人の一人として郷土史の領域で顕彰されるにとどまっており、音楽研究による学術的な存在意義は見出されてこなかった。

今回の報告では、黒木について研究することの意義を概観した上で、音楽教師として３か月ほど着任した関西学院での彼の足跡を、数少ない史資料から読み説く。また、この経験が黒木にとってどのような意味を持つものだったのかを検証する。

グローバルマーケットと結びついたパプアニューギニアのネットバッグ生産―二人のアーティストの活動を通して―

新本 万里子（文化人類学）

パプアニューギニアでは、ネットバッグとバスケットが女性による伝統的な手工芸品として作られてきた。近年、グローバルマーケット――とくにオーストラリアの観光開発による市場の拡大――に結びついて、ネットバッグの産地に変化が起こっている。本発表では、グローバルマーケットと結びついたネットバッグ生産の現在を、二人のアーティストの活動を中心にみていく。

事例とするのは、アクリル毛糸製ネットバッグを市場に売り込む一人の女性と、植物の靭皮繊維製ネットバッグを販売するもう一人の女性の活動である。それぞれ、グローバルマーケットに進出する機会を捉えた彼女たちの意識的な活動と、生産グループの組織化をみることができる。パプアニューギニアのネットバッグ生産は、開発援助に結びつきながらも、南アジアの布生産やアフリカのバスケット生産に比べれば、開発援助の直接的な介入という要素が薄いことも合わせて明らかにしたい。

政治・運動と視覚表現―ダッカ旧市街の「独立戦争壁画」とバングラデシュ美術―

五十嵐 理奈（文化人類学）

1971 年のバングラデシュ独立後、今なお政治闘争の資源である「我々の独立戦争」は、国や政党による政治パフォーマンスにだけではなく、美術作家が作品に、庶民の乗物リキシャ装飾や映画などの大衆美術に、さまざまな視覚表現として展開されてきた。とくに、首都ダッカ旧市街では、独立翌年から 50 年にわたり、地域の少年たちによって毎年戦勝記念日に「独立戦争壁画」が描かれてきた。壁画は毎年新しく描き直され、消えていくイメージである。この壁画には、絵を保存することよりも、毎年繰り返し公共空間で描くという行為に重要性が見出され、人々の生活とともに生きる視覚表現のひとつである。本発表では、ある共通の歴史的経験に関わる視覚表現にテーマを絞り、目で鑑賞する美術ではなく、身体的経験としての視覚表現のあり方を事例に、視覚表現と社会との関係のあり方を探る。

関西学院大学西宮キャンパス（西宮上ケ原キャンパス）

関西学院の大学昇格の動きに伴って、1928 年に原田の森キャンパス２万 6,700 坪（約 88,110㎡）を 320 万円で譲渡し、阪神急行電鉄株式会社の仲介によって当時の兵庫県武庫郡甲東村上ケ原に７万坪（約 23 万 1,000㎡）を 55 万円で取得し、そこに総工費 161 万 7,000 円で校舎、グラウンドなどが整備された。

新キャンパスの全体および各校舎の設計は W. M. ヴォーリズが主宰するヴォーリズ建築事務所、施工は竹中工務店で、同年２月に起工、ちょうど１年後の 29 年２月に完成し、創立 40 周年にあたるその年の９月 28 日に新キャンパス落成祝賀式が行われた。

キャンパスは甲山山麓の上ケ原台地に展開し、甲山頂上の三角点と通称芝川通り（現、学園花通り）の中心線とを結ぶ直線を軸線に定め、正門、中央芝生、時計台頂点をその線上に位置づけた。

その線の右手に宗教館、神学部、文学部（後に大学法文学部）など理念的な意味を担う建物を、左手に学院本部、中央講堂、高等商業学部（後に大学商経学部）など実学的な意味を担う建物を配置し、完全な対称を若干崩す形で設計され、スパニッシュ・ミッション・スタイルによって統一感が与えられた。

さらに左手奥には中学部、学生寄宿舎、右手には宣教師館、日本人住宅などが整えられた。

このキャンパスは果樹園から連なる公園的な開放感を持ち、C. J. L. ベーツ院長は “We have no fences.” という言葉によってこのキャンパスを評した。

上ケ原キャンパスは基本的に 1929 年の基本設計を活かしながら、学院の拡充・拡大とともに法人、大学、高等部、中学部などの各関連施設が相次いで増築され、関西学院メインキャンパスを形成している。

（「西宮キャンパス」、関西学院事典（増補改訂版）、https://ef.kwansei.ac.jp/encyclopedia/detail/r_history_008469.html）

2024 年 4 月 20 日・21 日

民族藝術学会第 40 回大会実行委員会
実行委員：濱田琢司（委員長），岡本弘毅，丹羽朋子，服部　正，福内千絵
関西学院大学西宮上ケ原キャンパス
662-8501　兵庫県西宮市上ケ原一番町 1-155

民族藝術学会
560–8532 大阪府豊中市待兼山町 1–5
大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座内
TEL 06–6850–5120 / FAX 06–6850–5121